SHOW-HEYシネマルーム

★★

マトリックス・リローデッド

配給／ワーナー・ブラザース映画

２００３（平成１５）年7月１２日観賞

Data

監督：ウォシャウスキー兄弟
出演：キアヌ・リーブス／キャリー＝アン・モス／ローレンス・フィッシュバーン／ヒューゴ・ウィービング／ジャダ・ピンケット・スミス／モニカ・ベルッチ／ニール＆エイドリアン・レイメント

みどころ

今、若者に大人気の『マトリックス』。コンピューター文字が流れる中、複雑なストーリーが展開される。しかし、この映画の何が面白いのか、私にはサッパリわからない。「売りモノ」の格闘シーンやスーパーマン並みの超人力もバカバカしいと思えてしまうが・・・。思わせぶりなラストで次作への期待をもたせているものの、果たして第３作も同じように「成功」するのだろうか？

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

＜義務感で観た映画＞

今、若者に大人気の、あの『マトリックス・リローデッド』を観た。私は『マトリックス』は前作も観ていないし、そのパート２である『マトリックス・リローデッド』も本当はあまり観る気はなかった。しかし、招待券をもらったので一応観ておこうと思ったもの。動機はこのような義務感だけだった。そして、その結果は…。やはりはっきりいって時間の無駄・・・。

＜大作であることは認めるが…＞

この映画の製作に大金をかけていることはよくわかる。そして、「マシン軍団」に包囲された人間最後の都市「ザイオン」の生き残りをかけた戦いという大筋のストーリーは理解できる。また、『ロード・オブ・ザ・リング』ばりの舞台装置の豪華さにも一応は敬服。さらに格闘シーンでの物の壊し方も派手。衣装もそれぞれに工夫を凝らしている。

マトリックス・グッズも幅広い。主人公ネオのキャラクターグッズとしては「ネオコート」、「ネオサングラス」等があり、その他モーフィアス仕様のハンカチ・タイピンまでいっぱいある。このように製作にも宣伝にも大金をかけて若者の興味を引こうとしているこ

とはよくわかる。

＜何が面白くないか＞

「マトリックス」のイメージは、何といってもパソコン画面。そしてパソコン画面にはワケのわからないコンピューター文字が流れている。このように「情報が生命」、「パソコンがすべて」の映画だから、情報の伝達は一瞬の間。しかし、こういうワケのわからない情報の伝達が瞬時になされていることを映画を観る前提として理解せよ、と押しつけられたうえで、じっと観ているのは疲れるもの。こんなものを観ていて今どきの若者は本当に興奮するのかな、とまず思ってしまう。

第２に主人公ネオ（キアヌ・リーブス）がもつ超人的能力（超人力）のバカバカしさ。手の平で弾丸をストップさせたり、スーパーマン並みに空を飛んでみたり、何ともバカバカしい限り。

第３は格闘シーンのつまらなさ。この映画の売りモノのはずの空中戦やカンフー・空手による戦いは、私には全然現実感がなく面白くない。昔のブルース・リーの真剣なカンフー戦やジャッキー・チェンのコミカルなカンフー戦のほうがずっと面白い。さらに昨年の日本映画の名作『たそがれ清兵衛』で真田広之がみせた小太刀を使っての決闘シーンの方がよほど迫力があって美しい。

第４は悪役のエージェント・スミスというキャラクターのバカバカしさ。いつも黒いスーツに身をつつみ、黒のサングラスであらわれる悪役だが、何と今回は、そのコピー（分身）が無数に登場して何回もネオに挑み格闘する。しかし、何人かかっていっても全部負け。何ともバカバカしい格闘シーンが繰り広げられる。このようにこの映画の「売り」がすべて私にはバカバカしく見えるのだから、映画が面白くなくて当然だ。

＜ストーリーをきちんと理解するのは大変＞

この映画のストーリーをきちんと理解しようと思えば、その苦労は並大抵ではない。『ロード・オブ・ザ・リング』も複雑で難解だったが、これはイギリスの作家ジョン・ロナルド・ルーエル・トールキン（Ｊ．Ｒ．Ｒ．トールキン）が空想でつくりあげた原作の世界を描くものだからわかりにくくても仕方がないと納得できる。しかし、『マトリックス』は映画のために練りに練ってつくった脚本によるもの。大筋はわかるものの、細部に入ると、なぜこうなるのかなかなかわからない。もっとも、そんな細部のストーリーなどはどうでもいいと思えてくるが…。

＜配役はそれなりに＞

主人公のネオは御存知キアヌ・リーブス。その恋人トリニティにはキャリー＝アン・モス。そしてネオと予言者を信頼しネオと行動を共にするモーフィアスにはローレンス・フ

ィッシュバーン。悪役のエージェント・スミスにはヒューゴ・ウィービング。ここらの配役は第１作と同じで、多分最終章も変わらないはず。第２作の『マトリックス・リローデッド』に新たに登場するのはケッタイな「ザ・ツインズ」という化け物だが、これにはあまり興味はない。スケベなオジサンである私が唯一興味をもったのは、『マレーナ』（００年）、『アレックス』（０２年）に登場したイタリアの美人女優モニカ・ベルッチ。彼女はマトリックスの邪悪な王メロビンジアンの妻パーセフォニーを演じている。ちょっとした端役にすぎないが、その魅力でネオを誘惑しようとし、ネオを助ける彼女の美貌を見ることが出来たことだけはよかったか…と少し満足。

＜思わせぶりなラストは…＞

『マトリックス・リローデッド』は、３部作のうちの第２章。従って、最終章が予定されているため、ラストはそれを期待させる思わせぶりなところで突然終わる。これもミエミエの戦略だ。『ロード・オブ・ザ・リング』の第１部が尻切れトンボで終わった時は、思わず観客席から「えーっ」という声が湧いたが、それと同じようなもの。

２００３（平成１５）年7月１４日記